
除夜の鐘と共に

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

除夜の鐘と共に

【NZコード】

N3405D

【作者名】

勝田博

【あらすじ】

仕事納めの帰りに見つけたお店。雅人は誘われるよいに、店に入つた・・・。

「お疲れ様、じゃあ、良い年を」仕事納めの最後の日。職場の同僚と居酒屋で騒いだ。恒例の挨拶を交わして

別れたが、何故か酔えずに気が滅入った。それほど酒は強くは無いはずだが・・・街は人で溢れかえっていた。

雅人と同じに、仕事納めのサラリーマン、若いカップルに子供連れまで混じっていた。時間はまだ9時だ。

帰つても誰もいない雅人は、一人ブラブラ歩きだした。酔っ払いを苦も無く避ける自分に驚いた。かなり飲んだはずだが酔いは殆ど無い。不思議に感じながらも、軽い足どりに心までが軽く感じられた。真っ直ぐ駅まで続く繁華街を、雅人は人ごみを縫つて進んでいった。わき道を覗き込み、良さそうな店を物色しながら歩いていたのだ。物色といつても、

実際に内容はわからない。ぼつたくりにのバー や キャバレーも多いのだ。遊びなれていない雅人は、結局ブラブラふらつくことしか出来なかつた。既に駅が視界に入つてきた。足どりは軽いが、いつものパターンに終わりそうな感じがしてきた。残る最後のわき道を覗いたとき、雅人は不思議な感覚に捉われた。見るからに場末の飲み屋があるだけだが、足は知らずにわき道へと吸い込まれて行つた。赤提灯、立ち飲み、そしてスナック。どれも雅人の趣味ではなかつた。懷にはボーナスの残りが入つていた。こんなところで飲むのならと、振り返ろうとした時、小さな看板を見つめたのだ。小料理屋の看板で「美子」と書かれていた。すりガラスの引き戸の上は、僅かに覗ける透明ガラスが埋め込んでいた。雅人は何気なく見るつもりが、ガラスに張り付きそうなほどに見入つてしまつた。カウンターだけの小さな店だが、店主らしい着物姿の女性が一人で動いていた。洗物でもしているのか、せわしなく流しの前を行つたり来たりして

いた。時おり見えるその顔は小顔の日本の日本人だった。

雅人は引き込まれるように店の引き戸に手を掛け、一気に開いた。「いらっしゃいませ」透き通るような声と、透き通るような肌。僅かに目じりが上がり、おちょぼ口の美人だった。この界隈では何度も飲んでいたが、この店 자체の記憶すら無かつた。かと言って、新店舗でもなさそうだった。

「何なさいますか」女性は箸置きと箸を置いて雅人に尋ねた。
「じゃあ、ビールを」女性はにつこりと笑い、ビールとグラスを出した。

「どうぞ」女性がビールを傾け、雅人はグラスを傾けた。

「初めてですよね」お通しを出しながら雅人に尋ねた。

「ええ、まあ」美人に引かれて入ってきたとは言えなかつた。

「美子です。どうぞ、御覗戻に」やや吊り上つた目は、笑うと一本の線になる。今風の美人ではないが、雅人は不思議とこの美子に惹かれた。お腹もいっぱいのはずだが、雅人は薦められるままにつまみを平らげた。結局二時間居たがお客様は雅人一人だけだった。
「明日は、大晦日、御予定はありますか」帰り際に美子が尋ねた。
雅人はその言葉の意味が理解出来ずに、首をひねつた。

「いえ、明日は休もうと思つていましたが、いらっしゃるのであれば、開けてお待ちしています」

「はあ？」まだ、意味が理解出来ずについ、声を出してしまつた。

「いえ、お見受けしたところ、独身に見えたもので、寂しい大晦日を過ごすのならば、ご一緒にと・・・」美子の言葉を理解した雅人は、はつきりと驚いた。まさか、自分ひとりの為に営業するとは思えなかつたのだ。

「ほかにもいらっしゃるんですか」余計なことだと思いつつも、雅人は尋ねずには居られなかつた。

「いえ、今日のお客様は、貴方だけですから」美子は恥じらいの表情で雅人を見つめた。『春が来た』雅人は心からそう思った。

「はい、来ます。必ず来ます」雅人は力いっぱい答えた。

「でも、なぜですか、初めての客なのに」またも余計だと知りつも尋ねてしまつた。

「私も、一人で大晦日を迎えるのが寂しくて・・・」雅人は有頂天だつた。美子の恥じらいの表情も、店のつまみも雰囲気も居酒屋でしか飲まない雅人には全てが新鮮だつた。しかも、料金は高くは無い。雅人は九時の約束をして店を出た。目抜き通りにはまだ多くの人が歩いていた。振り返ると、美子の看板は見当たらなかつた。店が有つたあたりは暗く闇に埋もれていた。もう、店じまいしたようだ。雅人は駅に向かつた歩き出した。先ほど以上に足は軽く感じられた。『こんなことがあるのか』雅人は店での会話を思い出し、一人顔がほころんだ。翌朝の目覚めは最高だつた。あれだけ飲んでも一日酔いにもなつていなかつた。『美子』では、ビールだけだつたが、五本は飲んでいるはずだつた。しかし、気分がいいことに越したことは無い。それ以上考えもせずに、雅人は風呂に飛び込んだ。

夜が待ち遠しい。夕方には電車に乗つて、昨日の街に降り立つた。時間はある。雅人は目抜き通りには向かわずに、駅前のパチンコ店に入つていつた。

調子の良い時には、全てが良いようだ。僅かな元手で大勝し、その一部の出玉でハンドバッグを交換した。お礼のお土産も出来て懐も暖かい、上手く行けば正月も一緒に居れる様な気がした。足どりは昨日よりさらに軽くなつた。まるで羽が生えたように、宙を滑るようだ。

『美子』看板は消えていた。ほかの客が入らないようにだろう。雅人の心も軽くなつた。

「こんばんは」雅人は静かに引き戸を開けた。
「お待ちしてました」美子はそう言つてカウンターから出てきた。
「あの、これ」雅人は景品のハンドバッグを差し出した。
「何かしら」受け取りながら美子は尋ねた。

「いえ、お礼です。わざわざ誘つて頂いた」雅人は照れくさそうに

答えた。景品どころは雅人は女性にプレゼントをした事さえなかつたのだ。

バッグを選ぶのも随分と長い時間かかったのだ。

「そんな、私が一人で寂しかつただけですから」それでも、美子は嬉しそうに笑つた。

「さあ、どうぞ、おでんにしましたけど、お嫌いですか」

「とんでもない。お好きです」この言葉に、一人は吹き出した。店は休業と言う事もあつて、美子も一緒にお酒を飲んだ。

「あの」不意に雅人はまじめな顔で尋ねた。

「はい、なんですか」

「お正月は、お暇ですか。良かつたら初詣でも……」酒の勢いで、雅人は尋ねた

「わたしと？」美子は驚いたように聞き返した。

「すいません、御迷惑でしたね」頭をかきながら謝つた。

「とんでもありません、いいんですか私なんかで」美子は嫌がつてはいな様だ。

「わたし……いえ、美子さんが良いのです」本心で、そう思つた。「まあ。嬉しい」美子は両手を合わせて喜んだ。

「本当ですか」雅人の目が光つた。

「出来たらずつと一緒に居てほしいくらい」俯き加減で答えた声は、次第に小さくなつていった。

「一緒に居ます、ずっと……」その途端、雅人の目は回りだした。

「ほんとうね」美子の声も遠くに聞こえ始めた。

「は……い」どうにか発した言葉は、それが最後だつた。

ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・

除夜の鐘が鳴り始めた。雅人の頭にはその音が微かに響いていた。

ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・ゴーン・

「……だわ」美子が話しかけている。そう思つたが、身体の言う事は聞かなかつた。

ゴーン・ゴーン・ゴーン・

「・・・寂しくないわ」

「え？」いきなり声が出た。声と思つただけかも知れない。

「もう、ずっと一緒に寂しくないわ」美子は確かにそう言つた。

「何がで。・ぎう・・ごぶ・・ぼ。『ごぼ』雅人の言葉は声にならなかつた。

ゴーん・・・・・ゴーん・・・・。

「これで、百八つ目ね」不意に雅人の視界が宙に浮いた。そして雅人の目に映つたのは、バラバラにされた自分の身体だった。どうやら百八つ目は

、首を切り落とされたようだ。除夜の鐘もそこで鳴り止んだ。そこには美子の笑い声がこだました。

そのわき道にあつた店は、二十年も昔に取り壊されていた。

店主の女性は、年の瀬に強盗に押し入られ、滅多刺しで殺された。その後、毎年若者が姿を消すが、誰も気づきはしなかつた。

ここは東京のど真ん中、一人が姿を消しても騒がれない街。そして今年も一人の若者が闇の餌食となつた。知らない店で古風な美人を見たら気をつけてください。闇の世界に引き込まれるかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405d/>

除夜の鐘と共に

2010年10月11日02時51分発行